

# 小学生社会科における「思考力」を高める授業検討

## —工業生産分野での問いの構造図に焦点を当てて—

教育学研究科 教育実践創成専攻 教科領域実践開発コース 中等教科教育分野 雨宮莉帆

### 1. 問題と研究の目的

小学校学習指導要領(平成29年告示)では、社会科の目標を「社会的な見方・考え方を働かせ、課題を追究したり解決したりする活動を通して、グローバル化する国際社会に主体的に生きる平和で民主的な国家及び社会の形成者に必要な公民としての資質・能力の基礎を次の通り育成することを目指す。」としている。つまり、国政に参与する地位における国民である「公民」としての資質・能力を育成することが、すでに小学校段階から求められているということになるだろう。そこから私は、教師は一方的な知識の詰め込みを重視せず、児童もただ受動的に授業を受けるだけでなく、社会の出来事に関心を持ち、積極的に自ら考えたり、調べたりすることが今日の社会科教育において求められているのではないかと考えた。

森分(1978)は、著者『社会科授業構成の理論と方法』において、40年前の平均的な社会科の授業は教科書をベースに授業をし、社会的事象をトータルに、より詳しく概念内容豊かな言葉で「解説」しようとするものであったと言及している。そして、こうした社会科教育の問題点を大きく分けて四つ提示している。

- ①「教材過剰」
- ②「事象の断片的羅列的学习」
- ③「転移しない知識(他事例に活用できない個別事象についての事実的記述的な知識)」
- ④「知的に挑戦しない面白くない授業」

これら四つの課題が浮き彫りになり、さらに学習指導要領の改訂が重ねられ、グループワーク

や新聞づくり、作品発表会等のいわゆる「アクティブ・ラーニング」が導入される授業が増加した。しかし、根本的には40年前と変化していない。森分(1978)は、「アクティブ・ラーニングの実践の多くは、教師が一方的に知識を詰め込む授業を子どもに自主的にさせているだけである。」としている。私は、その上でこれらの問題は、いわゆるアクティブ・ラーニングが導入されても解決には至らず、それは教師が調べていた知識を児童に調べさせるにとどまっていると考えた。であるならば、児童自らが課題意識を持ち、調べ、考えるまでには至っていないことになる。そこで、本研究で児童がただ知識を探す、調べるだけのような授業を構成するのではなく、児童が自ら「考え」、「深く学ぶ」授業を検討したいと考えた。

以上を踏まえ、本研究の目的を次のように設定する。

・発問の構成について検討することで、小学校社会科における「思考力」を高める授業を検討すること。

この目的を実現するための手段は二つある。  
①具体的に児童が「考える」場面を想定し、どのような発問を投げかければ「考える」活動を行うことができるのか、問いの構造図を作成すること。

②発問を考えさせる上で必要となってくる教材(資料)選びをし、どのような資料を提示すれば、児童の「思考力」を働かせることができるかを検討すること。

### 2. 先行研究

片上(2014)は著者『社会科教師のための「言語力」研究』において、「発問とは、教師による

疑問形の形をとって行われる、授業の中で子どもへの働きかけのすべてを指す」とし、大きく分けてA 授業構成レベルの発問、B 授業展開レベルの発問に分けられるとしている。ここから、「発問」と「問い」の違いがわかる。教師が教材研究から作り出すものは「問い」である。その「問い」が児童に伝わるようにわかりやすく作り変えたものが「発問」となる。A群の発問は、学習課題として位置付けられる中核発問を含む主要発問である。B群の発問は、A群の発問を支えたり、活かしたりするための補助発問ということになる。本研究においても、授業中における発問をA群、B群に分けて考えると、A群の発問によって授業を構想することができる。さらに片上(2014)は、社会科の発問に関して以下のように述べている。

授業は、発問(問い)の構造体という側面をもち、発問(問い)の構造体として成り立つ。その場合、発問構造の中心に位置づけるのが、中核発問といわれるものである。学習指導案では、一般に、学習課題として位置づけられる。社会科の場合、中核発問は一般的には「なぜ型」(Why型)と「どのように=いかに型」(How型)がほとんどである。

これらの社会科の発問は森分(1978)が主張する、「科学的探求学習」と共通する部分がある。森分(1978)は、「問いが体系的・構造的に組織されている授業を『科学的探求学習』と位置付け、特徴として、

- ①中核発問が設定してあり、それをできるだけ短い時間で児童が探究活動を通して、答えに辿り着くことができるよう、中小の問いが入れ子構造で組織されていること。
- ②中小の問いは、唐突に教師側から投げかけられているような印象を子ども側に与えないように、問いの直前に行われていた活動を踏まえて問いが投げかけられていること。
- ③多くの問いが「なぜ、どうして」から構成されており、原因を追究する問いを連続して配

置することで、事実と事実の関連性を明らかにすること。

という三つの特徴を言及している。

一方、渡部・井手口(2020)は上記の①～③を基に、「現代の科学的探求学習では、本質的な問い(Essential question)が設定されており、時代を超えて社会的事象を説明することができるような、いわゆる『普遍的理論』を子どもたち自身がつかみとること(構築すること)が要求されている」としている。

発問は教師が行うものであり、それがそのまま子どもの「問い」になるとは限らない。したがって、教師の発問が子どもに響くようにしなければならない。それを片上(2014)は、二つの図式で表している。一つは、【教師→教材研究(教材解釈)→問い→発問→子ども】である。教師は、教材研究から「問い」を作り出さなければならない、さらにその「問い」を子どもに伝わるように「発問」へと具体化する。もう一つは、【子ども疑問→教師→教材「再解釈」→問い→発問→子ども】である。子どもの疑問や考え等々をすくい取り、教師がその教材を再解釈して発問にし、再び全体で共通に考えることができるように返す。

以上を踏まえ、本研究では、前者の【教師→教材研究(教材解釈)→問い→発問→子ども】の図式を基に発問を検討する。その際、まずは中核発問を決め、それにたどり着くための補助発問を検討することとし、授業計画を次に述べる。

### 3. 授業計画

- (1) 実習校…山梨県内の公立小学校
- (2) 対象…第5学年1クラスの児童27名
- (3) 期間…令和3年6月～12月
- (4) 授業実践

本研究では、各単元1時間ずつ、2単元の合計2時間で実践を行った。

#### 1 時間目

- ①単元名「大工場と中小工場のちがい」
- ②本時のねらい

大工場と中小工場の違いに気づくことができる。大工場と中小工場の利点を理解し、相互の関係性について考えることができる。

③学習活動

前時の活動で、児童は工業の盛んな地域やその地域別の工業生産額と内訳を学習した。また、主な大工場や小さな工場の写真も教科書で触れてきている。本時の学習では、グラフから大工場と中小工場の違いや、それぞれの特徴を捉えることができるようにする。さらに、工場数に着目し、中小工場が全体の99%を占める理由を考える。児童から考えを引き出すために、考える時間を充分に取り、友達の見解を知る時間を増やす。

④本時における中核発問

◎なぜ効率の良い大工場の数は少なく、中小工場数が多いのだろうか？

⑤授業の主な概要

・児童がグラフでそれぞれの工場の数や生産額についてのグラフを読み取り、中小工場は日本のおよそ99%以上であるが、大工場よりも生産額が少ない。一方大工場は、およそ1%しかないが生産額は中小工場を上回っていることを理解する。  
 ・大工場が多い方が生産額はさらに増やすことができるのではないか、しかしそのような現状にないことはなぜか、資料を根拠にして仮説を立て、論理的に検証していく。

⑥本時の展開（指導案抜粋）

学習過程	学習活動と内容 発問（○）中核発問（◎）
導入	<ul style="list-style-type: none"> <li>・前時の復習</li> <li>○自動車は何が組み立てていたか？</li> <li>○自動車の部品はどこで作られていたか？</li> <li>・めあての提示</li> </ul>
大きな工場と小さな工場では、それぞれどのような生産の特徴があるのだろうか。	
展開①	<ul style="list-style-type: none"> <li>・大工場、中小工場の違いを理解す</li> </ul>

	る。 ・働く人が1~299人までの工場を中小工場、働く人が300人以上の工場を大工場という。 ○日本では、大工場、中小工場のどちらが多いだろうか？ ・パワーポイントに提示するグラフから、中小工場と大工場の特徴を読み取る。 ○工場数の割合を示したグラフから何がわかるだろうか？ ○工場数、生産額のグラフから何がわかるだろうか？ ○なぜ工場数が少ないのに、生産額が多いのだろうか？
展開②	・考える材料として、中小工場の例を知る。 ・ワークシートのグラフも読み取りながら考える。 ◎なぜ、効率の良い大工場の数は少なく、中小工場の数が多いのだろうか？
まとめ	・教科書 p.157 の岩佐さんのお話を読む。 ・大工場は、製品を効率よく大量につくることができる。 ・中小工場は、大工場にはできない様々な技術を持っている。

2 時間目

①単元名「日本の工業生産の変化」

②本時のねらい

日本の工業生産の特徴を理解し、工業生産のこれまでの変化を捉えることができる。日本の工業を取り巻く変化に着目し、現在の工業生産の現状や課題を捉えることができる。

③学習活動

前時までの活動で、児童は地図やグラフなど資料を用いながら、日本の工業生産の特徴を学習した。本時の活動では、引き続きグラフを用いて現在の日本の工業生産の現状を読み取るとともに、日本の工業生産は昔と比較し、どのように変化してきたのかを捉えるこ

とができるようにする。その際、既習事項と関連付け、日本の工業生産の変化の背景を考える。

④本時における中核発問

◎なぜ日本国内の生産台数は減ってきているのに、日本の工業生産額は増えているのだろうか？

⑤授業の主な概要

- ・昔と今を比べ、日本の工業生産の変化についての四つのグラフを読み取る。
- ・電化製品の国内生産台数は減ってきていること、日本の工業生産額は増加してきているという、一見矛盾にみえることについて考える。そのために、前時で学習している既習事項を根拠とする。

⑥本時の展開（指導案抜粋）

学習過程	学習活動と内容 発問（○）中核発問（◎）
導入	<ul style="list-style-type: none"> <li>・前時の復習</li> <li>・めあての提示</li> </ul> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 10px auto; width: fit-content;">日本の工業生産はどのように変化してきたのだろうか？</div>
展開①	<p>○日本の工場の数は昔に比べて増えてきているか、減ってきているか予想する。なぜそう思ったのか。</p> <p>○外国にある日本の会社の数は昔に比べて増えてきているか、減ってきているか予想する。なぜそう思ったのか。</p> <p>○工場数の変化と外国にある日本の会社の数の変化のグラフからわかることを読み取る。</p> <p>○なぜ、工場数は減ってきているのか。</p>
展開②	<p>○日本の工業生産額は昔に比べて増えてきているか、減ってきているか。</p> <p>○日本の電化製品の国内生産台数は昔に比べて増えているか、減っているか予想する。それはなぜか。</p>

	<p>○グラフをみてどのような変化が読みとれるか。</p> <p>◎なぜ、日本の電化製品の国内生産台数は減ってきているのに、工業生産額は増えているのだろうか。</p>
まとめ	<ul style="list-style-type: none"> <li>・日本の生産台数や工場数は減っているが、日本の工業生産額は増えている。</li> <li>・高性能な機械製品を作るようになってきている。</li> </ul>

4. 授業の実際と考察

本研究の成果を二つの方法から考察する。それは、ワークシートでの記述と、発話分析である。前述した研究の目的と照らし合わせながら、事前に作成した「問いの構造図」を基に分析をする。成果は、二つある。

- ①思考力を高めるために、児童が「考える」場面を読み取ることができたことである。
- ②問いの構造図を作成することによって教師は見通しを持つことができるとともに、中小の発問（補助発問）にそれぞれ関連性があるため、唐突に投げかけられているような発問にならず、児童の思考の流れを止めないようにすることができたことである。

以上の成果について考察をしていく。

（1）1時間目の授業についての考察

一つ目の思考力を高めるために、児童が自ら「考える」ことができたかを確認する。ワークシートに以下のような記述をしている児童が複数いた。

1時間目のワークシートより、

- ・中小工場では、大工場では作れないものを作っているから。
- ・手作業で人間が行っているから。
- ・中小工場は、それぞれの得意とする部類があるから。

ここから、児童は提示された資料を正確に読み取り、自己の考察をしっかりと表現していることがわかる。また、写真の細かい部分まで着目したり、グラフからわかることを書いたりして。本時で学習したことも根拠にしながら、

思考していることも読み取ることができる。  
また、展開①での授業中の発話から、

T	: (グラフから) それぞれの生産額と工場数を比べてわかることはありますか?
C1	: 中小工場の方が数は多いけれど、生産額は大工場の方が多い。
T	: なぜ、大工場は数が少ないのに、生産額は多いのかな?
C2	: 働く人が多いからたくさん作れる。
C3	: 機械が作っているから。
T	: 生産額が多いのであれば、大工場が多い方が良いと思いませんか?
C	: たしかに。そうだ。
T	: でも実際は、中小工場の方が多いです。なぜだろう? ということについて今日は考えていきます。

大工場と中小工場の定義をおさえ、グラフを比較し違いを読み取る活動を行った。そこで、生産額と工場数の違いを読み取り、児童も疑問を持っていることがわかる。教師が問いかけた問いではあるが、効率の良い工場が多い方が良いと思っている児童が多くいた。その疑問が本時の中核発問に当たるため、授業中に自分たちから生まれた疑問を課題に持って考えようとしていることが読み取れる。

さらに、展開②では、中核発問を考えるための材料をパワーポイント(画像)において全員で確認する活動を行った。具体的な発話は、

T	: これは何を作っているところだろう?
C1	: 宝石。
T	: 誰が作っているだろう?
C2	: 人。人間。
T	: では、これは?
C3	: 印伝。
T	: 前に学習した自動車の部品を作っている工場もそうですね。このように、宝石も、印伝も、自動車の部品も、人間が作っているんだね。

画像とは別に、手元に生産の種別内訳のグラフを配り、以上の2つを手掛かりに思考させると、中核発問に対する思考の発話から、

T	: 意見を発表してくれる人はいますか?
C1	: 中小工場が部品をたくさん作らないと、大工場が自動車を組み立てられない。
C2	: 大工場でできないものが、中小工場では手作業でできるから。
T	: これらのことから、日本の中小工場には、人間の行う何が必要?
C3	: 技術が必要。 (グラフの読み取り)
T	: グラフから、中小工場にはどんな特徴があるのかな?
C4	: いろいろなものを同じくらい作っている。

中小工場の例である宝石業などの画像から、細かな作業は人間の手作業でないとできないことを読み取ることができていたり、グラフを比較し、大工場、中小工場の生産の特徴を探し出すことができていたりしている。

二つ目の、問いの構造図が有効に働いたのかどうかを確認する。事前に以下のように問いの構造図を作成した。

◎MQ:	なぜ効率の良い大工場の数は少なく、中小工場の数の方が多いのか。
◎MA:	中小工場は、大工場にはできない様々な技術を持っているから。
○Q1:	日本では、大工場と中小工場のどちらが多いと思うか。それはなぜか。(予想)
↳	・Q1-1: 自動車はどのように組み立てられていたか。
↳	・Q1-2: 自動車の部品は何工場で作られていたか。
○Q2:	なぜ工場数が少ないのに、生産額は多いのだろうか。
↳	・Q2-1: 工場数の割合のグラフを見て、どのようなことがわかるか。
↳	・Q2-2: 工場数、生産額のグラフを比べてどのようなことがわかるか。
○Q3:	一度にたくさん作れるのであれば、大工場が多い方が良いのではないか。
○Q4:	具体席な中小工場には何があるのだろうか。
↳	・Q4-1: 山梨県で有名な中小工場には何が

あるのだろうか。  
 ◯Q5: ワークシートのグラフから読み取れることは何だろうか。

ここから、Q2-1、Q2-2 で工場数と生産額の関係グラフから読み取り、その二つの事実からQ2 において疑問を抱いている様子がわかった。教師が意図的に Q3 のような間違えた発問を投げかけると、児童は「そうかもしれない。」「いや、でもこれでいいのだ。」とニパターンの考えを持った。しかし、事実として中小工場の数の方が多いわけであるから、その理由を、根拠を持って言えるように導いている。Q4、Q5 の問いは、MQ を思考するための手掛かりになっている。Q4-1 は中小工場の例を示す際に、工業生産は児童たちにはどうしても遠い存在であることから、なるべく身近な山梨県の産業を取り入れたところ、宝石や印伝は児童の反応が良く、一定の効果はあったと考えている。つまり、Q4、Q5 の思考で、MA に繋がる思考ができていく児童が多い。

続けて、2 時間目の授業についても同じように分析をする。

(2) 2 時間目の授業についての考察

一つ目の思考力を高めるために、児童が自ら「考える」ことができたか確認する。ワークシートに以下のような記述をしている児童が多く見られた。

- ・日本の技術が高い分、一つ一つの製品の値段が上がった。
- ・手作業で時間をかけて丁寧に作っているから製品にお金が多くかかる。
- ・日本は輸入に頼っているから。(外国から原料を輸入し、加工して輸出しているからお金がかかる)

ここから、児童は前時の「大工場と中小工場のちがい」で学習した事項(日本の中小工場には、さまざまな高い技術があること)をもとに、思考していることがわかる。また、前単元の「日本の工業生産と貿易・運輸」で学習した日本の貿易の特色を思い出しながら、思考していることもわかる。

展開①で工業生産の変化を予想し、グラフで

結果を読み取る活動した。授業中の発話から、

T	: ここまでの項目の変化を読み取ってきて、なにか違和感がある人はいますか?
C1	: <u>日本の工業生産額は増えているのに、生産台数は減っている。</u>
T	: 同じことを感じた人?
C	: (多くの児童が手を挙げる)
T	: 今まで学習してきた日本の工業生産の特色を参考に、教科書に戻って見てもいいです。なぜ、日本の電化製品の国内生産台数は減ってきているのに、工業生産額は増えているのか考えてみましょう。

工業生産の変化を読み取っていく段階で、児童は違和感を覚えていることがわかる。下線部は本時の中核発問であるため、多くの児童が違和感を覚えたことについて探求することができたのではないか。またこれは、教師が一方向的に提示する発問ではなく、児童と共に作り出した発問であり、児童の主体性がなければ出てこないものである。

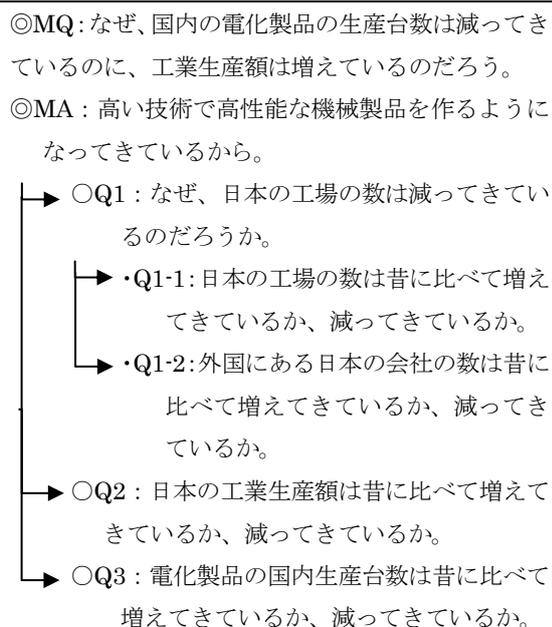
展開②の中核発問に対する思考の発話から、

T	: (中核発問に対する)考えを発表してくれる人はいますか?
C1	: 工場で働く人が減ってきているから。
T	: 工場で働く人が減ってくると、工場はどうなるかな?
C2	: 効率が悪くなる。生産のスピードが遅くなる。
T	: そうだね。逆に人が減ってきて・・・
C3	: 機械が作る。けど費用がかかる。
T	: 機械もあったね。他に意見はありますか?
C4	: 一つ一つの製品の生産額が上がったのと、他の製品の生産台数が上がった。
T	: 一つ一つの製品の値段が上がるってどういうこと? 日本の貿易の特色を書いてくれた子がいたんだけど、貿易はどのようにしていた?
C5	: 原料外国から輸入して、加工して、輸出していた。
T	: そうやって高いものに作り替えて輸出していたんだね。

本時は教科書や指導書では、過去から現在まで

の日本の工業生産の変化を読み取り、これからはどうなっていくのかを考える時間であったが、工業生産の変化を読み取ったあとの発問を少し異なる視点で提示した。児童は思考していることはあるが、発言を聞いていてもうまく表現できる児童は少ない。そこで発言を掘り下げて他の児童も巻き込みことで、一つの答えにたどり着くことができている。

二つ目の、問いの構造図が有効に働いたのかどうかを確認する。事前に以下のように問いの構造図を作成した。



児童はQ2、Q3で矛盾を感じ、課題や疑問を持つことで、MQへと自ら思考を進めることができている。MQに対する考えは、前時までに学習した事項に思考を巡らせ、結論を導き出していることが読み取れる。

## 5. 成果と課題、今後の展望

以上の考察から、2時間の授業を通して得られた成果は、児童が思考力を働かせ考えることができたこと、「問いの構造図」を作成することで、児童が自然に自らの思考を展開できたことであると言える。つまり、「問いの構造図」は有効に働いた。

しかし、授業実践を行った上で、課題点が四つ明らかになった。

一つ目は、上記の成果が出た児童がほとんど

であったが、中には思考することが上手くできていない、もしくは思考したことを表現することができていない児童もワークシートを見ると見受けられる。そのため、ワークシートに自分の考えを書くことができず、他者の意見を写しているだけであった。また、ワークシートには何かしら記入している様子は見受けられるものの、思考の方向が少しずれてしまっている児童も見受けられた。そのような児童はおそらく、問いが完全に理解できていないと思われる。例えば、1時間目のMQ「なぜ、効率の良い大工場の数は少なく、中小工場の数の方が多いのだろう？」に対するMAは、経済等の事象を踏まえると、中小工場は大工場の下請けの役割を果たしていること、高い人間の技術でしか作ることができない製品を作っていることの二つがあると考えられる。しかし、前者は詳しく教科書等で扱われていないため、本研究では後者しか扱うことができなかった。この中核発問に対する答えは社会事象が複雑に絡み合うため、小学校第五学年の段階で扱うことのできる問いを立てていきたい。このように、今回思考が上手く働かない児童にも思考を展開することができるようにするため、問いの立て方を新しく研究していきたい。

二つ目は、教材（使用した資料）は適切であったかどうかという点である。1時間目は、中小工場の例に甲州印伝と宝石を例として提示した。なぜこの2つかというと、山梨県には大きな工業地帯もなく、また、小学5年生という発達段階を踏まえ、工場（工業）をあまり身近なものとして捉えていないと予想したため、できるだけ身近な製品で自分事に捉えてもらいたかったからである。しかし、それが逆に中小工場＝印伝や宝石などの製品を作る工場と偏った概念を植え付けてはいないか。中小工場に着目した場合、山梨県内においても、自動車の部品を扱っている中小工場があるため、それらの中小工場を例に出すことも考えたい。また、2時間目において、児童に思考させることも目的としたために、一見矛盾しているようにみえる二つの要素を少し無理やり繋げ、問いを設定

した。それは、中核発問「なぜ、日本の電化製品の国内生産台数は減ってきているのに、工業生産額は増えているのだろうか？」とそのグラフである。



図の左の折れ線グラフは電化製品（特に掃除機、洗濯機、冷蔵庫に絞られている）の生産台数の変化を示しているものであるのに対し、右の帯グラフは電化製品だけでなく、全ての工業生産額の変化を示しているため、比較する対象としてあまり適切ではなかったように感じる。実際、ワークシートを見ても「電化製品ではなく、他の製品の値段が上がった、生産量が増えた」と考えている児童も見受けられた。これも間違いではないが、証拠を示す資料を用意することができなかったことも課題として残った。

三つ目は、教科書や資料集には無い資料を提示したため、教科書の内容から逸れてしまわないか、児童の思考を教科書と異なる方向へもっていつてしまわないか、という点である。教師が独自で探してくる資料は、それらの点を考慮しながら慎重に選ばねければならない。同時に、そのような資料は情報過多になってしまう危険性もある。日本の工業生産の特色や変化は、要因が一つの事象ではなく、複雑な要素が絡み合っているために様々な回答が出てきてもおかしくはない。実際、2時間目の中核発問に対する回答が、「一つ一つの製品の値段が高くなる」というものがあつた。製品の値段が上がることで工業生産額は大きくなる、という思考はもちろん間違いではないが、教科書や指導書には記載されていない。そうすると、教科書には記載されていないことに疑問を持つ児童がいたり、教科書から逸れてしまったりする。資料の課題に関しては、本研究では、2時間とも全

員で共有したいグラフが多かったため、スライド形式での提示となった。しかし、映像で分析してみると、後ろの席の児童は少し見づらく感じていたと思うため、実際には資料はなるべく手元にあつた方が良かったと思った。

四つ目は、授業分析の方法についてである。本研究は、ワークシートと授業中の発話から分析をした。分析をしていく中で成果や課題は見つかったり、問いの構造図のどの部分で児童の思考が生まれたかが予測できたりはしたが、ワークシートに記入するまでに何を考えていたのか、児童の思考を完全に見取ることができなかったため、果たしてこの分析方法は妥当だったのか、他に分析方法はなかったか、など再検討していきたい。

以上の課題を踏まえ、特に資料の適切さを検討すること、学級全員が理想ではあるが、一人でも多くの児童が「思考する」活動に参加できるような体制を検討することを重視し、今後の研究を重ねていきたい。同時に、「問い」の立て方についてもさらに研究していきたい。そうすることで、積極的に自ら調べ、考え、他者と議論することができる一公民を育てることができるのではないだろうか。

#### 【引用・参考文献】

- ・小学校学習指導要領（平成29年告示）文部科学省
- ・片上宗二「社会科教師のための『言語力』研究」風間書房2014
- ・森分孝治「社会科授業構成の理論と方法」明治図書1978
- ・宮崎猛・吉田和義「社会科教育の創造 新改訂 - 基礎・理論・実践 -」教育出版2019
- ・渡部竜也・井手口泰典『社会科授業づくりの理論と方法』明治図書2020